Osaka University Knowledge Archive

Title	藤原基経と詩人たち
Author(s)	滝川, 幸司
Citation	語文, 84-85, p. 25-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69055
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

藤原基経と詩人たち

滝川幸司

はじめに

後藤昭雄[1]は、藤原北家嫡流、所謂摂関家の、良房・良相・基経・時平・実頼らが詩文を制作した実態、詩作の場を提供した事実を考証し、「上層貴族も詩の制作に携わっていたのであり、平安朝漢詩文の世界は幅広い人々の参加によって形作られていたのである」と述べる。これは、漢詩文が摂関家嫡流においても重要視されていることの証左でもある。

その中で藤原基経については、島田忠臣との「唱酬」の存在、その詩作が「他律的詠作ではなく」「詠懐の表現手段」であったことを指摘するものの、場の提供者としての側面には触れていない[2]。しかし、当時の詩文集を閲するに、基経は自邸で多くの文事を開いている。本稿では、後藤の驥尾に付して、基経が主催した場について考察し、基経と詩人たちの関係について検討を行う。

一、

資料に見える基経邸での文事を時代順に掲出し、概観する。

○貞観十六年正月二十二日　東斎にて東風粧梅の詩を賦せしむ

（『菅家文草』巻一・67「早春陪右丞相東斎同賦東風粧梅各分一字探得迎字」、68「書斎雨日独対梅花」）

67詩が基経邸詩会での作である。この詩の成立年次については、68詩の「今年の内宴勅有りて、春雪早梅に映ずといふことを賦す。内宴の後朝、右丞相詩客五六人を招き、東風梅を粧ふといふことを賦せしむ」という自注、及び結句「兵部侍郎すら興猶ほ催す」が参考になる。道真は貞観十六正月十五日任兵部少輔、二月二十九日任民部少輔（『公卿補任』）で、兵部少輔時代は貞観十六年の僅かな期間である。貞観十六年の内宴は正月二十一日に開かれており（『日本三代実録』同日条。但し詩題明記されず）、自注によれば基経邸詩会はその後朝開催なので、期日は貞観十六年正月二

十二日となる。

○元慶七年春（か）　客亭にて、道真賦詩

（『菅家文草』巻二・101「春日於相国客亭見鷗鳥戯前池有感賦詩」）

98詩題注の「元慶六年夏」や、100詩にいう加賀権守就任が元慶七年正月十一日（『公卿補任』）であることなど『菅家文草』の前後の排列から、元慶七年頃と推測される。「相国」は太政大臣で、元慶四年十二月四日（『公卿補任』）以後藤原基経である。詩題からは詩会が開かれたかは明確でない。何らかの事情で基経邸を訪ねた道真が即興で詠んだか。この頃道真は、87「博士難」、98「有所思」などから窺えるように、誹謗中傷されていた時期でもある。

○元慶八年（か）　東廊にて孝経を講じ畢る。竟宴賦詩

（『菅家文草』巻二・146「相国東廊講孝経畢各分一字得忠順弗失而事其上」）

147詩題注に「八年十二月廿五日」とあることなど『菅家文草』の排列から元慶八年頃と考えられる。詩題によれば、基経邸での孝経講書終了後詩会が開かれたらしい。

○仁和元年二月二十五日　文亭にて初めて世説新語講書、賦詩

（『菅家文草』巻二・149「相府文亭始読世説新書聊命春酒同賦雨洗杏壇花応教」）

「相府」は太政大臣藤原基経。これも講書に関わる詩会である。なおこの講書については、次の記録も参考にすべきである。(3)

…此の道成朝臣、伝へ聞く、故清慎公（実頼）天暦十一年御読経の次、諸道論義を召す。其の日紀伝・医道同じく参候すと云々。実否を聞かんが為に、右府（実資）辺に案内せしむ。御報に云はく、天暦十一年二月廿五日、清慎公、今日博士に大内記後生朝臣を為し、始めて世説を読ましむ。尚復四人、文章生藤雅材、学生同公方、同如丘、小野時遇等也。巳の剋始めて読ましむ。講筵に預る者云々。祖父堀川太政殿下（基経）、博士右大弁佐世朝臣に読ましむる也。世堀川院に東廊設くと称す。後生朝臣は、佐世朝臣の孫也。堀川院始めて読まるる日、二月廿五日なりと云々。自然の感、尤も此の時有る耳。作文有り。題に云はく、春日左相府閤亭に於て世説を講ずるを聴きて、同じく花気酒中に新しといふことを賦すと云々（已上清慎公御記）。　（『左経記』長元八年五月三日）

ここに記される講書が、『菅家文草』に見える世説講書だと考えられる。講師は藤原佐世である。

○仁和二年　東閤にて、道真の餞宴

（『菅家文草』巻二・186「相国東閤餞席〈探得花字〉」）

「相国」は太政大臣藤原基経。道真は仁和二年正月十六日に任讃岐守（『日本三代実録』）。その赴任に際しての餞別宴である。

○仁和三年頃（か）　東庭の小池の紫藤が初めて花を開く。置酒、詩会

（『田氏家集』巻下・131「大相府東庭貯水成小池小池種一紫藤至於今春始発花房酌於花下翫以賦之応教」）

「大相府」は太政大臣藤原基経。この詩の前に128「元慶七年冬美濃大雪以詩記之」、129「府城雪後作」と美濃での作が排列される。忠臣は元慶七年正月に美濃介に任じられ[4]、仁和三年には任期を終えて帰京したであろうから、これはその頃の作か。

○年次未詳　基経邸東閤に小侯が孝経を学ぶのを聴いて、賦詩

（『扶桑集』巻九・80「陪相国東閤聴諸小侯聚学孝経」紀長谷雄）

紀長谷雄の活躍時期からして「相国」は藤原基経であろう。この詩序、末尾を欠く。「小侯」は基経の子弟をいう。「齠齔の年」（＝歯が抜け替わる頃の子供）である彼らのために孝経が講ぜられたのである。詩序が残欠であるため詳細は不明だが、基経の子弟が学ぶ様子を詩に賦したのだろうか。

以上、基経邸文事の頻繁な開催が知られる。道真に関わる例が多いが、『菅家文草』という恵まれた資料が残存することによると思われる。資料からも道真以外の参加は明らかである。

これらの存在は、基経邸でかなりの文事が行われていたことを証すであろう。

二、

前掲資料中に、基経邸の「東閤」で行われた文事が見えたが、既に大系注などに指摘があるように、「東閤」は公孫弘の故事を踏まえる。すなわち、宰相となった公孫弘が、「東閤」を開いて賢人を呼び、謀議に参与させた故事である[5]。『菅家文草』『田氏家集』には、他にも「東閤」における文事が散見するが、多くは基経邸文事と理解してよかろう。

○東閤孝経講書、竟宴

（『菅家文草』巻二・140「傷藤進士呈東閤諸執事」）

「藤進士」を悼んで東閤の執事に道真が送った詩だが[6]、結句に「東閤孝経竟宴、進士母に事ふる詩あり」との自注が存する。竟宴がある以上先に講書が行われたであろう。孝経講書は、基経邸において既に確認できた。これも基経邸文事と考えてよいであろう。なお140詩、頸聯で「秋声父を喪ひて哭せしに校べず、猶勝る暁涙児を夢みて悲しぶに」と亡父（是善）・亡息（阿満）を詠む。是善の死は元慶四年八月三十日（『日本三代実録』）、阿満の死とその夢は「夢阿満」（『菅家文草』巻二・117）に詠まれるが、排列から元慶七年作と考えられる。従って140詩自身はそれ以後の作で、自注に見える孝経竟宴はさらに遡る時期となる。

○東閤にて詩会（？）

（『菅家文草』巻五・357「左金吾相公於宣風坊臨水亭餞別奥州刺史同賦親字〈古調十四韻〉」）

「左金吾相公」（左衛門督）は藤原時平で、寛平四年二月二十二日任。翌五年二月十六日に任中納言で離任したらしい（『公卿補任』）。この詩もその間の成立となる。「奥州刺史」は藤原佐世である[7]。詩中に時平の言葉として「東閤昔年相遇ひし意、東山今日独り行く身」とあり、「東閤」で時平は佐世と会ったという。やはり時平の父基経の東閤と考えるべきであろう。前掲の世説講書

において佐世は講師であった。時平もそうした講書、あるいは頻繁に開かれた詩会で同席した可能性もある。

○寛平二年春（か）

（『田氏家集』巻下・149「賦雨中桜花〈春字〉」）

「春字」との注から探韻と推測されるので、詩会での作であろう。尾聯に「東閣に年を経て老樹と為る」と東閣（東閤）の桜を詠むことからも、この詩会は東閤、すなわち基経邸で開かれたと考えられる。なお自注に「祇に東閣に陪すること三十年」と記すのは、桜に忠臣自身を喩えていようか。[8] なお、145「春風歌〈八韻成篇陪寛平二年内宴応制作〉」が寛平二年春の作、153「傷左尚書」が寛平二年五月十六日の橘広相の死（『日本紀略』）に際しての作であるから、間にある149詩は、寛平二年春の作と考えられる。[9]

以上が、前節にあげた文事に付け加えられるものである。

三、

二節に渉って概観したように、基経は積極的に詩人を集めて文事を開催していたが、このような行為にはいかなる意味があるのだろうか。参加する詩人及びその詩の内容から考察を加える。

基経邸文事に参集した詩人としては、菅原道真、紀長谷雄、藤原佐世、島田忠臣、藤進士（未詳）、時平を含め基経の子息たちが確認できたが、注目すべきは、藤原佐世と島田忠臣であろう。

藤原佐世は、既に指摘があるように、[10]「藤氏儒士始」（『尊卑分脈』）で基経の侍読とされる（『二中歴』巻二・摂関侍読）。基経の家司であったともいう（『江談抄』巻一・34）。また、仁和二年の人事では、讃岐守へ転出した道真の後任として式部少輔に任じられ、[11] 阿衡紛議において橘広相追い落としに一役買うなど、基経の近習であった。なお、基経薨去後陸奥守に左遷されており、[12] この点からも基経との近しい関係が知られる。

島田忠臣は、古くから基経に近侍したと思しい。前掲「賦雨中桜花」自注は、それを顕著に示すであろう。「余多く大相国の恩私を蒙る」（『田氏家集』巻中・74「秋日遊南都諸寺」自注）ともいい、「主」と呼ぶこともある（同巻中・107「元慶七年春大相賜文馬有感自題〈于時赴任美濃教令騎去〉」）。基経と忠臣の関係については金原理の考察もあり、[13] 後藤がいうように唱和もある。[14] また、基経は忠臣に採詩を命じたこともある（同巻中・88「元慶五年冬大相国以拙詩草五百余篇始屏風十帖仍題長句謹以謝上」）。なお、忠臣の弟良臣は基経の近習である（『菅家文草』巻二・93「奉和兵部侍郎哭舎弟大夫之作押韻」）。

忠臣には基経邸詩会での作も残る。詩の尾聯をあげる。

料量紫茸花下尽　料量す紫茸花の下に尽くるを
家香更作国香飛　家香は更に国香と作りて飛ばん
（『田氏家集』巻下・131a「大相府東庭貯水成小池小池種一紫藤至於今春始発花房酌於花下甄以賦之応教」）

久来用意依芳蔭　久来意を用ゐて芳蔭に依る
不向人間趁百花　人間に向て百花を趁はず　（同前131b）

a詩では、藤という藤原氏の香が「国香」（＝国を代表する香）

となると称揚し、b詩では、その藤の「蔭」に寄り、他の花を探しはしないと、藤原氏への忠誠と庇護下にいる自分を詠む。基経邸での詩会だから当然の表現だとの見解もあろうが、前掲「秋日遊南都諸寺」は、基経と同座していないにも拘らず、その「恩」を詠む。忠臣の姿勢は、基経の面前だからというわけではない。

このように忠臣と基経は、近習と主という関係で一貫している。忠臣は基経の庇護を願う立場にいたのである。

基経邸文事で多くの資料を残す菅原道真はどうか。道真は、佐世や忠臣のような基経との主従関係はなかったようである。道真が基経邸に出入りするようになったのは、やはり忠臣との関係であろうか。しかし、佐世にしろ、忠臣にしろ、道真の父是善門下であり、是善と基経の関係があったかとも思われるが、それを裏付ける資料はない。但し、主従関係にあったとはいい難い道真も、詩の表現は忠臣に通じる面がある。貞観十六年正月二十二日の詩会では、次のように詩を結んでいる。

繁華太早千般色　繁華太だ早し千般の色
号令猶閑五日程　号令猶ほ閑なり五日の程
好是銀塩多結蘂　好し是れ銀塩多く蘂を結ぶ
応縁丞相欲和羹　応に丞相の羹を和せんとするに縁るべし

（『菅家文草』巻一・67「早春陪右丞相東斎同賦東風粧梅各分一字探得迎字」）

多くの花が早くも様々な色に咲き、「号令」（＝風）が「五日の程」は静かだという。「儒者太平の瑞応を論ずるに、…五日に一たび風ふき、風条を鳴らさずと皆言ふ」（『論衡』是応）に基づき、風が五日に一度吹き枝を鳴らさない状況を「閑」と表現したのであろう。すなわち天下太平をいう。そして「銀塩」のような白梅が花を結ぶのは、「丞相」（＝基経）が羹を調えようとしているからだと詠むのだが、「和羹」は「若し和羹を作らば、爾は惟れ塩梅」（『尚書』説命下）に基づき、天子を輔佐することを喩える。従って最後の四句は、花が咲き乱れ風が五日に一度吹く天下太平を描き、「銀塩」の如き梅が花を結ぶのは、基経が羹を整えようと「梅」を用いる、すなわち天子の良き輔佐であるためだと詠じていることになる。天下太平の光景と基経の丞相としての立場を讃えるのである。

春日於相国客亭見鷗鳥戯前池有感賦詩

人知鳥意鳥知人　人は鳥の意を知り鳥は人を知る
莫道沙鷗素性馴　道ふ莫かれ沙鷗素より性馴れたりと
非与紫鱗争楽水　紫鱗と争ひて水を楽しむに非ず
将欲霜翅不同塵　将に霜翅の塵に同じくせざらんとせんとす
当時未謂浮沈定　当時未だ謂はず浮沈定まれりと
数処唯無去就頻　数処唯だ無きのみ去就頻りなること
棲息若容三四日　棲息若し三四日を容さば
遂生何必入懐仁　遂生何ぞ必しも入りて仁に懐かん

（『菅家文草』巻二・101）

元慶七年春頃基経客亭での作だが、先述したように、この時期道真は所謂「詩人無用論」に囲まれ中傷されていた。[15] 道真にとっ

ては心安からざる状況である。この詩、池で戯れる鷗に感じて詠んだ詩だが、鷗には道真自身が重ねられていよう。

首聯で、鷗は人の心を知ると詠むのは、『列子』に記される著名な故事に基づく。[16] 第一句の「人は鳥の意を知る」は、『列子』の故事とは正反対だが、鷗＝道真自身の心を基経は知っているだろうとの思いを詠んでいると考え得る。基経が自分の心情を理解してくれるからこそ、基経邸にいるのだというのであろう。二句目に、元来人に馴れるのではないと詠むのは、鷗がこの池で戯れるのも、邸の主人基経の心を知っているからであるというのだろう。ここも基経邸に来た道真の心情を重ねる。

以下、鷗について、頷聯では、池の水を楽しむことを魚と争っているのではなく、塵によって霜のように白い羽を汚さないために池にいるのだと詠むが、「楽水」が、『論語』雍也篇の「知者は水を楽しむ」に基づくことからも、私は知者であることを争っているのではないと道真自身をいうのであろうし、「同塵」が『老子』の「其の光を和げ、其の塵を同じくす」によることからも、自分は俗世間に交わらないようにしているのだと自身を詠んでいるのだろう。同様に頸聯で、鷗が浮かびあるいは沈みあちらこちらに行き来する姿を詠むのは、自らの浮沈や去就がいまだ定まらない状況を重ねているのである。

このように鷗に我が身を重ねて詠じているのだが、俗世間から逃れること、我が身の不安定さが主たる内容であり、そのような不安を基経に訴えているといえよう。「詩人無用論」に囲まれ中傷を受けていた頃の詩作であることを考慮すれば、基経に庇護を求めていると理解できよう。

世説講書における道真の詩も存する。

相府文亭始読世説新書聊命春酒同賦雨洗杏壇花応教

学者誰家異杏壇　学者誰が家ぞ杏壇を異にせん
紅花好是雨中看　紅花好是し雨中に看るに
功能欲効雲先潤　功能効さんとして雲先づ潤ふ
燮理応知樹不寒　燮理応に知るべし樹寒らざるを
唯有十旬相長養　唯だ十旬相長養すること有るとも
豈教五出且銷残　豈に五出をして且た銷残せしめんや
晩来春酒終無算　晩来春酒終に算無し
花色人顔酔一般　花色人顔酔ふこと一般

（『菅家文草』巻二・149）

この詩、詩題にあるように、雨に濡れる花を詠む。春雨の「功能」「燮理」によって、花がいかに美しく咲くかをいい、春酒に酔って花も人も同じく赤くなっている様子で結ぶ。この詩については、今浜通隆[17]が「春雨の、「紅花」に対する素晴らしく有り難い働きを作者が強調しているのは、勿論、一方で、春雨を当日のご主人である基経に、「紅花」を作者自身に比喩させようとしたからに違いないのである。より一段の「雨露之恩」を期待したいとの作者自身の気持ちをそこに表現しようとしたからに違いないのである」という見解に従うべきであろう。

以上の詩によれば、やはり道真も忠臣と同様に基経を讃美して

いる。そして、これもまた忠臣同様、基経の面前だから称揚したというわけではないようである。

宮門雪映春遊後　宮門雪は映ず春遊の後

相府風粧夜飲来　相府風は粧ふ夜飲来

〈今年内宴有勅、賦春雪映早梅。内宴後朝、右丞相招詩客五六人、賦東風粧梅。余雖不才、侍此両宴。故云〉

〈今年内宴勅有りて、春雪早梅に映ずといふことを賦す。内宴後朝、右丞相詩客五六人を招きて、東風梅を粧ふといふことを賦す。余不才と雖も、此の両宴に侍る。故に云ふ〉　（『菅家文草』巻一・68「書斎雨日独対梅花」）

宮中内宴と基経詩会を対にして詠んでいるが、この詩は、詩題に明らかなように独詠である。それにも拘らず、内宴と基経邸詩会を対にし「此の両宴に侍」ったことを詠じているのである。独詠でありながら、内宴と基経邸詩会に参加したことを同列に詠むのは、内宴に比すべき場として基経邸詩会を高く位置付け、参加を名誉に感じているからであろう。

基経を「主」と詠ずる忠臣程ではないが、道真も基経を讃美し、また基経に庇護を願う立場にいたと考えられる。

基経邸文事での作品を概観したが、基経を讃美する詩、あるいは基経に庇護を求める詩がその大半である。しかも、基経と同座しなくとも基経への恩を詠む詩もあり、詩人たちは、基経の庇護下にいるという意識で詩を賦しているといえよう。[18]

四

ところで、前掲の資料を見る限り、基経邸文事が開かれるようになったのは、貞観十六年が最初であったが、これは基経の右大臣就任以後である。基経自身の詩才については後藤前掲論文に指摘があるが、資料的な制約があるにしても、詩文に対する興味だけなら、もっと早くから文事が見えてもよかろう。大臣就任以後に頻繁に見出せるのは、何か理由が存すると考えられる。大臣と詩人という視点からさらに考察を加える。

右大臣藤原三守は薨伝に「三守早く大学に入り、五経を受習す。…詩人を招引し、杯を接へ席を促す」とあって、必ずしも大臣時代とはいえないものの、詩人を招いたことが見える。[19]

基経の父良房邸では、次のような文事が開かれている。

○仁寿元年三月十日　右大臣良房東都第にて仁明天皇を偲び賦詩歌（『日本文徳実録』仁寿元年）

○貞観六年二月二十五日　清和天皇、太政大臣良房東京染殿行幸、桜を観る。詩宴（『日本三代実録』貞観六年）

○貞観八年閏三月一日　清和天皇、太政大臣良房染殿第へ行幸、桜を観る。詩宴（『日本三代実録』貞観八年）

これらは既に後藤昭雄[20]に指摘がある。いずれも場の提供者としての立場であるが、基経と比較すれば、恒常的に詩会を開いたということはない。また、いずれも天皇と関わるもので、必ずしも私的な文事とはいい難い。殊に貞観六・八年の例は清和天皇の行

幸詩宴であり、良房が場を提供しているとはいえ、主催者は清和である。つまり現存資料上良房主催の詩会は、一例しかないのである。

注目したいのは、藤原良相である。後藤に指摘があるが、良相は頻繁に詩会を開いている。島田忠臣との関係も知られ、文事を好んだらしい。良相は薨伝に「文学の士を愛好し、大学中貧寒の生を択び、時に綿絹を賜ふ」（『日本三代実録』貞観九年十月十日条）と見え、大学生に援助をしている。「弱冠に及びて、始めて大学に遊ぶ」（同前）と、大学出身であるのは、三守と同様である。「晩秋陪右丞相開府賜飲。于時美作献白鹿。仍命賦四韻〈同勒徴興升膺〉」（『田氏家集』巻上・22）は、美作国が白鹿を献上した際に詠まれた忠臣の詩であるが、詩題に「晩秋」、詩中に「秋旻」とあり、秋に白鹿が献上された記録は、貞観四年九月二十七日に「美作国白鹿を献ず」（『日本三代実録』）と見え、同年の右大臣は良相である。すなわち、貞観四年の良相邸での宴となる。他にも、同じく『田氏家集』（巻上・37）に「於右丞相省中直廬読史記竟。詠史得高祖、応教」の作があるが、貞観三〜六年の間の作と推測され[21]、その間の右大臣は良相である。良相の直廬で史記が講書され、その竟宴が行われたことを示す資料である。これらは『田氏家集』に見えるが、忠臣だけではなく他の詩人も参集していたことは確実である。このような詩会・講書は基経も行っていたが、良相は大学寮出身ということもあってか、基経には見出し得ない詩会も開いている。

賦冬日可愛　　橘広相

貞観の初、大階平にして、寰海静なり。右丞相客館を開き、以て英才を延く。枝中丞をして毎旬試みるに文章筆札を以てし、其の高下を第せしめ、随ふに賞賚を以てす。盛んなる哉洋々たる美、周公哺を吐き、魏帝席を虚しうすと雖も、何を以てか旃に加へん。相公の両子、年皆成童なり。風度清格、文藻日に新たなり。亦預りて学士の列に在り。自余の数子、各詩篇有り。故に具に名姓を録せざるなり。十一月中旬の試、冬日愛すべしといふことを賦し得たり。請ふ格律を共にし文を成さんと云ふこと爾り。（『本朝文粋』巻八・203）

この詩序によれば貞観の始[22]、良相が「客館」を開いて「英才」を招き、毎旬「枝中丞」（大江音人）に「文章筆札」を試みさせ、その「高下」を判定して賞を賜ったというのである。これは良相薨伝にいう「時に学生の能文の者を喚びて、詩を賦せしめ物を賚ふこと数なり」にも対応する。しかも、単なる詩会・講書とは異なり、「試」が行われており、一種の勉強会とでもいえる場である。さらに序文によれば、良相の二人の子息も参加している。基経も講書に子息を参加させていたが、そもそも講書自体が子息のために開かれたものであった。しかるに良相の旬試は、自分の子息を他の詩人と同列に扱っているのである。

この旬試の存在は、良相主催文事の高い専門性を推測させる。先に指摘した良相邸詩会や直廬史記竟宴にしても、旬試を行うほどの人物が主催するのであるから、参加する詩人としても研鑽の

場という意識を持ったであろう。もちろん、これを良相と詩人たちが文芸によって結びつく場であると判断するには慎重でなければならない。参集する詩人の意識には、基経邸文事に参加した如く、庇護・恩顧を願う意思がなかったとはいえないし、この旬試にしても、広相の序の「客館を開き、以て英才を延く」という措辞は、明らかに基経邸文事と同様公孫弘東閣の故事を踏まえているからである。しかし、そうであったとしても、旬試の存在が物語るように、その専門性の高さは、基経邸文事以上であったように思われる。良相主催文事には詩作も残るので、そこからさらに検討を続ける。

五、

基経邸文事での作品は、基経を讃美する、あるいは基経に庇護を願う詩が多く見えた。ところが良相邸文事では必ずしもそうではない。例えば、貞観四年晩秋、美作国が白鹿を献上した際の良相邸詩会で、島田忠臣は次のような詩を詠んでいる。

晩秋陪右丞相開府賜飲。于時美作献白鹿。仍命賦四韻〈同勒徴興升鷹〉

金方銀獣色相仍　金方銀獣色相仍り
待得秋旻至有徴　秋旻を待得つに至りて徴有り
過隙白駒人自感　隙を過ぐる白駒人自ら感ず
度関疑馬吏先興　関を度る疑馬吏先づ興く
行時練段翻三尺　行く時は練段三尺を翻し
臥処霜封可数升　臥す処は霜封ずること数升ばかり
労苦挟輈州境遠　労苦輈を挟み州境遠し
来呈上瑞聖君鷹　来呈せる上瑞聖君鷹る

（『田氏家集』巻上・22）

「銀獣」（＝白鹿）という瑞兆の出現、献上されていく白鹿を描写し、白鹿の様子を練り絹や霜に見立てる。そして尾聯では、道中苦労を重ねつつ遠き国境から運ばれてきた白鹿が、聖天子の「上瑞」に当たることをいう。瑞兆が現れるほどの世だと讃えるのである。この詩は、良相邸の文事の作でありながら、基経邸文事であれば、必ず詠まれたであろう主催者への賞讃が見えないのである。また、次のような例もある。

冬日可愛　島田忠臣

厚絮輕裘不足言　厚絮輕裘言ふに足らず
可憐冬景好当軒　憐れむべし冬景好く軒に当るを
墐依暖煦虫応出　墐は暖煦に依りて虫応に出づべし
林擬春晴鳥欲喧　林は春晴を擬して鳥喧かんとす
不愛満炉紅火熾　愛でず満炉紅火熾かりなるを
何愁綿地白霜繁　何ぞ愁へん綿地白霜繁きを
生逢聖運垂仁日　生れて聖運仁を垂るる日に逢ひ
光耀多添徳政温　光耀多く添ふ徳政の温かきに

（『田氏家集』巻上・28）

先に注目した旬試での作だが、冬の日光の暖かさを詠じつつ、尾聯では「聖」天子の「仁」「徳政」を称揚するのである。ここ

でも場の主催者である良相には触れていない。

ここにあげた二首は、ともに良相主催の文事で詠まれた詩である。それが双方ともに場の主催者に触れず、天子の恩徳を詠む点にはやはり留意されよう。少なくとも基経邸文事であれば、主催者の基経の恩徳が詠まれ称揚されていたのである。白鹿献上は瑞兆を主題にするから、天子が称揚されるのも理解できなくはないが、「冬日可愛」は天子を称揚しなければならない主題では、必ずしもない。[23] この二例はともに忠臣の作である。あるいは忠臣の嗜好なのかもしれないが、それにしても場の主催者に触れないのは異例であるように思う。忠臣自身基経邸文事では、基経を、また藤原氏を称揚していたのであった。「冬日可愛」などは天皇主催の宮廷詩宴で詠まれた作品であるといわれても不自然ではない。旬試とは、宮廷詩宴での詠作を学習する場であったのだろうか。この辺りは資料も少ないので判断は難しいが、いずれにしろ良相邸文事は、基経邸文事が基経讃美に傾くのとは異なる場であるといえようか。

ところで、良相は旬試において、自らの子息をも「預りて学士の列に在」らしめていたが、基経の子息も孝経の講書を受けていた。しかし、良相の子が「学士」と同列にいたのに対し、基経の子は、いまだ「齠齔の年」ではあったが、「碩学に命じて、此の小侯に授けしむ」（紀長谷雄「陪相国東閤聴諸小侯聚学孝経」）という立場であった。ここには子息の待遇の差異が明白に表れている。良相は旬試を受ける学士と同列に子息を扱ったのに対し、基経は子息のために「碩学」を喚び孝経を講書させたのである。「陪相国東閤聴諸小侯聚学孝経」という題からすれば、その場に参集した詩人は講書に陪席していたと推測される。すなわち、この孝経講書は基経の子息のために開かれた場であって、講師にしても陪席した詩人にしても、基経及びその子息に奉仕するために参集させられたといえるのではないだろうか。良相と基経の文事の最大の相違はここにあると思うのである。

前述したように、基経邸文事は、貞観十六年右大臣時代から見える。良相は大学寮出身であるから文事を開くのも不審ではないが、基経は違う。詩才はあったが、文事を頻繁に開くのは右大臣になってからである。殊に、元慶・仁和という、摂政・関白に就いた時期に多く見出せるのは、摂関という地位と文事の密接な結びつきを示してもいよう。基経邸文事は、単に好学・好文によって開かれたのではなく、摂関という地位と深く関わるものであったと推測されるのである。

摂関である基経を頂点に置き参加した詩人たちは基経を讃美する。また、基経の命に応えて子息への講書などの奉仕を行う。そこには、基経を頂点に置く世界が形成されていくことになるのではないか。ここで想起されるのが、天皇が行う宮廷詩宴である。宮廷詩宴は、天皇を頂点とした場で、その秩序を詩文による称揚によって維持する機能があるのだが、[24] 同様に、基経邸文事も基経を頂点に置いた秩序を作り上げることになるであろう。なお、前掲した道真詩（68「書斎雨日独対梅花」）で、宮中内宴と基経邸

詩会が同列に扱われていたことも、これを裏付けるように思われる。

そしてこのような文事が人臣最初の摂政である良房にはほぼ見出せないことは、基経の創出であったことを示すのではないだろうか。

基経邸文事の参加者は近習が中心であった。詩人以外にどれほどの人々が参加したかは不分明だが、参集する詩人が近習であるということは、それ以外の参加者も近習であったと推測できる。従って基経邸文事は、基経に近侍する人々によって形成される場であると考えられよう。基経は、自らを主とし奉仕する官人達が参集する極めて政治的な場を作り上げようとしたということになろうか。基経邸文事の存在は、その場の形成に、漢詩文が寄与していたことを物語る。宮廷詩宴は、天皇を讃美する詩が詠まれることで、天皇を頂点とする社会の秩序を認識させ君臣の紐帯を再確認させる機能を持っていたが、それと同様な場として、基経は文事を自邸で開いたのだろう。そして基経を讃美する詩を詠み、講書を行うことで、詩人たちは基経に奉仕しているのである。[25]

六、

基経邸文事の性格について検討したが、その参加者は、基経にとってどのような存在なのであろうか。

基経から見れば、佐世・忠臣・道真らは同列の存在ではない。彼らはそれぞれ基経を称揚し、また基経に庇護を願うが、例えば忠臣は古くから近侍しているにも拘らず、官界において重要な地位を得たとはいえまい。また、道真についても、道真の讃岐赴任が決定した後の内宴で、基経は「明朝の風景何人に属けん」と道真に詠じ、道真をいたく感動させている（『菅家文草』巻三・184詩題）[26]が、前述した通り、道真の後任として式部少輔に佐世が任じられており、道真を慰めるような言葉を掛けたとはいえ、その配慮は道真の政治的立場にまでは及ばない。

佐世は藤氏儒者・家司という立場があるためか、忠臣・道真とは異なる位置を占めている。詩人からすれば、基経邸に参集し講書を行い詩を賦しながら庇護を願うが、基経の側からすれば、一定の配慮はあるものの、実際に誰を昇進させるか、あるいは自らの政権構想に取り込むかは、基経の選択でしかない。[27]

道真の後任に佐世を選んでいることからも、基経にとっては道真は儒者・詩人ではあってもそれ以上の存在ではなかったといえるかもしれない。たとえ讃岐赴任に際し道真を感動させる言葉を掛けたとしても、佐世に対する扱いとは自ずから異なる。基経にしても、いくら庇護を求められても、すべてに応じる必要はないであろう。藤原克己が「基経は、道真にとくに目をかけていたようです」[28]というのも、あくまで詩人・儒者としての道真であって、佐世のような位置を与えようという意識はなかったのではなかろうか。

おわりに

基経邸文事及び参集する詩人について論じた。基経邸文事の存在は、その好文を示すものではあるが、参集する詩人の中心となっているのは、近臣・近習であり、基経を「主」とする詩人であった。そうした関係になくとも、基経に庇護を願う詩人が参集していた。いわば、摂関である基経を頂点としてその恩沢を受けるために詩人たちは集まったといえよう。摂関という地位と漢詩文の結びつきが看取されるわけだが、基経以後の摂関家と漢詩文の関係についても、その構成原理、主催者の意図など、さらに検討を進める必要があろう。

注

（1）後藤昭雄「摂関家の詩人たち」（『平安朝文人志』吉川弘文館・平成五年、昭和六十三年初出）。

（2）後藤は同論文で基経の詩作は現存しないというが、次の詩の存在が知られる。「酔望西山仙賀遠　微臣涙落旧恩衣〈内宴、昭宣公〉」（『江談抄』巻四・29）。

（3）今浜通隆「仁和元年二月二十五日基経邸読書始について（上）―平安文学と『世説』其三―」（武蔵野文学2・平成五年三月）。

（4）『日本三代実録』元慶七年四月条に「廿一日丁巳。…従五位上行美濃介嶋田朝臣忠臣権行二玄蕃頭事一」とある。忠臣はこれ以前に美濃介であった。忠臣「拝美濃之後、蒙菅侍郎見視喜遙兼賀州詩草依本韻継和之」（『田氏家集』巻中・103）は、道真「喜被遙兼賀州外刺史」（『菅家文草』巻二・100）への和詩だが、道真詩にいう加賀権守兼任は、前述の如く元慶七年正月十一日。忠臣詩の第七句に「除書同日到」とあって、道真の任加賀権守と忠臣の任美濃介の辞令は同日に届いている。忠臣もこの時美濃介に任じられたと考えてよいであろう。

（5）『漢書』公孫弘伝「数年至二宰相一封レ侯。於レ是起二客館一、開二東閣一以延二賢人一、与参二謀議一」には「東閣」として見える。なお、「東閣」に付す顔師古注では「閤者、小門也。東向開レ之。避レ当二庭門一而引二賓客一、以別二於掾史官属一也」とある。顔師古の依拠した漢書では「東閣」とあったらしい。なお『芸文類聚』にも引用されるが「東閤」に作る。

（6）金原理「嶋田忠臣傳考」（『平安朝漢詩文の研究』九州大学出版会・昭和五十六年、昭和四十年初出）は、この「藤進士」及び『田氏家集』に見える「藤進士」を基経弟弘経とするが根拠が示されていない。弘経は卒伝等にも「進士」＝文章生となった形跡はない。

（7）大系注は藤原滋実を当てるが誤りであること、後藤昭雄「藤原佐世」（『平安朝漢文学論考　補訂版』勉誠出版・平成十七年、昭和五十四年初出）参照。

（8）蔵中スミ「島田忠臣年譜覚え書」（『田氏家集注　巻之上』和泉書院・平成三年）、本間洋一「院政期の漢詩世界序説（一）―『本朝無題詩』の時代へ―」（同志社女子大学学術研究年報54-1・平成十五年十二月）。

（9）同時期、他の「東閤」が見える。「東閤含将真咳唾、北溟売与偽珍瑰。三条印綬依レ恩佩、九首詩篇奉レ勅裁〈来章曰、蒼蠅旧讃元台弁、白体新詩大使裁。注云、近来有レ聞。裴頠云、礼部侍郎、得二白氏之体一。余読二此二句一、感二上句之不レ欺、兼下文之多レ詐。詶和之次、聊述二本情一。…〉」（『菅家文草』巻二・119（2）「余近叙詩情怨一篇呈菅十一著作郎長句二首偶然見詶更依本韻重答以

謝」）に見える「東閤」も公孫弘の故事に基づくが、この詩が118「詩情怨」に対する菅野惟肖へ唱酬であることを鑑みれば、この聯は、自注に引用する惟肖の詩の「蒼蠅旧讃元台弁、白体新詩大使裁」に対応し、さらに惟肖のこの聯は、道真「詩情怨」の「鴻臚館裏失二驪珠一、卿相門前歌二白雪一」に対応する。従ってこの「東閤」は、「詩情怨」における「卿相門前」に当たると考えられる。「卿相門前歌二白雪一」が、道真作かと疑われた藤納言を誹る詩を指すことからも、119（2）の「東閤」は基経邸の書斎を意味するものではないと思われる。また、都良香「陪左丞相東閤聴源皇子初学周易」（『本朝文粋』巻九・255）に、左大臣の東閤の存在が知られる。この詩序は冒頭に「湛灘」とあるが、柿村重松『本朝文粋注釈』（富山房・大正十一年）が指摘するように、太歳が申に在る歳をいい、貞観十八年に当たる。同年の左大臣は源融である。そもそも基経は左大臣になっていない。

（10）後藤「藤原佐世」（前掲）。

（11）彌永貞三「仁和二年の内宴」（『日本古代の政治と資料』高科書店・昭和六十三年、昭和三十七年初出）。

（12）『円珍和尚伝』、後藤「藤原佐世」（前掲）。

（13）金原「嶋田忠臣傳考」（前掲）。なお金原は二人の関係を「主人とその近習という関係を越えた人間的な暖かいつながりを感ずる」と評するが、「主人とその近習という関係」を低く見すぎることには疑問を感ずる。

（14）後藤「摂関家の詩人たち」（前掲）。

（15）後藤昭雄「「文人相軽」」（『平安朝漢文学論考　補訂版』前掲、昭和四十八年初出）。

（16）「列子曰、海上之人好レ鷗者、毎旦之二海上一、従二鷗鳥一遊。鷗鳥之至者、百数而不レ止。其父曰、吾聞二鷗鳥皆従レ汝好。取来我玩レ之。明日之海、鷗鳥舞而不レ下」（『芸文類聚』鷗）。なお『列子』では「鷗」を「漚」に作る。

（17）今浜通隆前掲論文。

（18）初唐駱賓王「帝京篇」に「汲黯薪逾積、孫弘閣未レ開」とあるが、自らの不遇をいうのに「孫弘閣」（＝東閤）がまだ開かないと詠む。東閤に行けば、不遇から脱せるという前提があろう。唐詩には同様な例が他にも見え、東閤は庇護を願う場でもあったと考えられる。本文中に述べた詩人の意識も、こうした唐詩の例と近似する。

（19）薨伝のこの記述については、後藤昭雄「本朝文粋抄⑧　右大臣に奉る書」（アジア遊学50・平成十五年四月）に指摘がある。

（20）後藤「摂関家の詩人たち」（前掲）。

（21）この前に排列される36「九日侍宴賦菊暖花未開応制」が、貞観三年九月九日重陽宴での作（『日本三代実録』）で、40「七年歳旦立春」が貞観七年の作なので、37詩の制作年次は貞観三年～貞観六年となる。

（22）「枝中丞」＝大江音人であるから、貞観元年～貞観四年までの間。なお後藤「摂関家の詩人たち」（前掲）参照。

（23）「冬日可愛」は、『春秋左氏伝』文公七年によるが、晉の趙衰の穏和な性格を喩える。

（24）拙稿「「風月」考―公宴詩会との関わりにおいて―」（語文66・平成八年七月）、「宇多朝の文壇」（奈良大学紀要30・平成十四年三月）などを参照されたい。

（25）宮廷詩宴と同じ構造を持つとはいっても、基経が自分を天皇に比したとまではいえないであろう。桑原朝子「詩人による政治―菅原道真の構想」（『平安朝の漢詩と「法」　文人貴族の貴族制構想の成立と挫折』東京大学出版会・平成十七年）は、基経が詩宴を開いた意図を、天皇が主催する内宴・重陽宴と同じ構造で、君主の部分に自分を置き換えたものを創出するねらいがあったかと

いう。この指摘自体は首肯し得るが、基経邸での道真の詩を取り上げ（『菅家文草』巻一・67）、道真は基経を「（天皇を）輔佐するに過ぎない存在」と位置付けており、基経の「意図に沿う詩を詠んでいない」と論じることから推測するに、桑原は、基経が自らを天皇に比したと考えているのだろう。しかし、基経にはそのような意図はなかったと理解すべきではないだろうか。桑原は、道真が基経のことを「輔佐するに過ぎない存在」と詠んでいると述べるが、「過ぎない」という評価は果たして詩のどの部分から読み取れるのであろうか。「輔佐するのに相応しい」と詠んでいるとの解釈も当然可能であり、本文中に概観したように基経に庇護を願う道真の詩文を見てくれれば、基経に対して輔佐にしか「過ぎない」と否定的なニュアンスを含めることは難しいと思う。道真が、基経自身を天子の優れた補佐として位置付けていることは、それこそが基経の意図であったという理解も可能であろう。

(26) なお藤原克己は、この内宴について「その内宴は道真に対する送別の宴も兼ねていて、そのことじたい破格の待遇だった」（「讃岐守時代」『菅原道真　詩人の運命』ウェッジ・平成十四年）というが、この内宴が道真の送別宴を兼ねていたことを裏付ける資料はない。公事である内宴が個人の送別宴を兼ねることがあり得るのか疑問が残る。

(27) 桑原朝子は前掲論文注158で「詩人としての強い自覚を持つ者の中に、摂関家に取り入ることで自らの昇進を図った者は存在しない」といい、忠臣・良臣兄弟が「藤原基経と相当近い関係にあったが、共に官位は一生あまり上がっておらず、人的繋がりを利用して官人としての利益を得ることをしていない」という。忠臣らが昇進しなかったことを根拠に、彼らが摂関家に取り入っていないと論じるのである。しかしこれは基経の立場と庇護を願う詩人たちの立場とを混同している。官位が一生上がらなかったのは、忠臣らが「人的繋がりを利用しなかった」からではなく、基経側にその意志がなかったからである。「人的繋がりを利用」すれば、必ず「官人としての利益」が得られるわけでもなかろう。

(28) 藤原「讃岐守時代」（前掲）。

—奈良大学文学部助教授—